

2014年、振り返ってみればこの年はとても忙しかった。年男のせいもあるのだろうが、丙午はあちこちを駆けた。北へ、南へ。そして海外へ。そんな一コマを振り返った時、北の大地でちょっとした乗り鉄したことを思い出した。そんな旅行記を書いてみたい。

日本生物工学学会 2014 年度大会の空き時間を活用して、というか抜け出して、いつもふるさと納税をしている東川町に鉄道を使って行ってみることにした。



朝 8 時、北海道最大の街だけあって、朝の札幌駅は通勤する人々の乗り降りでごった返していた。そんな中、岩見沢行の普通列車が入線する。

精悍な顔立ちの 733 や 735 系電車は北海道を代表する列車だと思う

この時間、札幌着の列車には夥しい人々。だが、札幌発の列車はそこそこ空いてるので何とか快適な旅ができそうである。

まずは 721 系の各駅停車で岩見沢まで行ってみる。



列車はゆっくり札幌駅を離れていく。苗穂、白石駅を過ぎて、進んでゆく。



北海道の列車は西日本の列車に比較して、豪傑な感じがするのは過酷な自然環境のせいかもしれない。

特急にしろ、通勤車両にしろ、武骨な外観が印象的だ。やはり車両のイメージは、その車両が使われる沿線の大切な要素であると思う。赤い 227 系（レッドウイング）などその最たるものではないかと思のだが、それにしても久々の広島地区への新車両投入。何ともうれしい。

列車は順調に岩見沢へ



赤い列車と言えば、もう置き換えが決まってしまう 2015 年の 3 月には姿を消してしまう 711 系が岩見沢に停車していた。

711 系は鋼鉄製の車体でいかにも北海道の列車である。その武骨さが耐寒性、耐雪性の高さを伺わせる。もう見れないのが残念だ。

赤字に白い帯が映える存在感のある電車である。



岩見沢にはかつては幾つも採炭地を結ぶいくつも盲腸線へのアクセス列車や東日本最大の操車場もあった駅だけあって、広大な敷地に今でもたくさんの側線が残っていた。

今では岩見沢運転所がその名残をとどめているに過ぎないようだ。

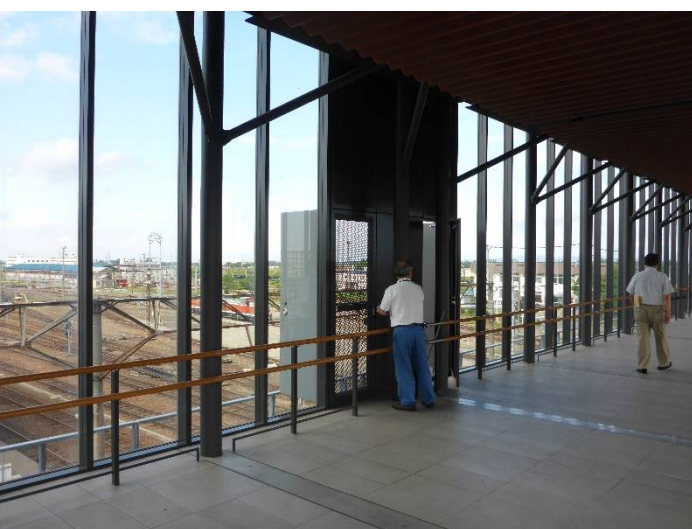
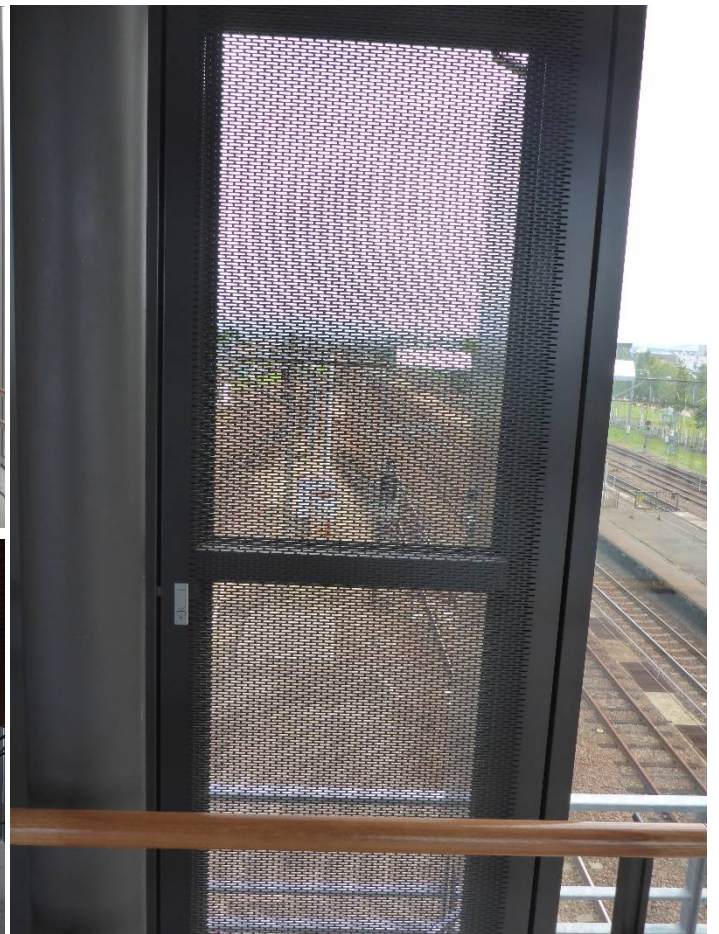
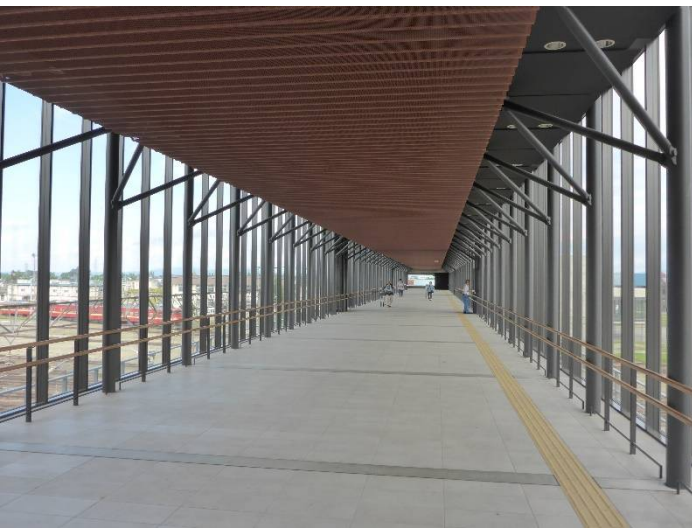
朝とはいえさすがにラッシュアワーを過ぎると札幌方面の列車にも余裕がみえるよう。旭川までの乗り継ぎにしばらく時間があるので岩見沢駅を見学してみようと思う。



岩見沢駅は北海道の 2 大路線函館本線と室蘭本線が交わる拠点駅、また、札幌、旭川のとの経由地としても重要なところ。

そんなことを考えているうちに、

(スーパー) カムイが飛んで行ってしまった！



岩見沢駅の駅前をよく整備されていて、美しい。

駅舎もいかしたレンガの土台、窓が大きく、光が贅沢ほど中に入り込んでくる。

それから、広大な構内を横切る連絡通路にもふんだんに大きな窓が取り入れられている。
ゆっくりと歩みを進めると心地よい風が横切ってゆく・・・光だけでないのか？

よく見ると所々に網掛けドアが設けられていて、そこから爽やかな風が入り込んでくる。
いいアイデアだと思う。

往々にして、ガラス張りだと風景に反して大気を感じられないことが多いのだが、ここでは大気と風景がリンクする瞬間がある。北海道の夏風は実に心地いい。



往時とは違い、少しがらんとした構内が寂しいが、思う存分鉄道風景を楽しめるまるで跨線橋のような連絡通路であった。

時間はまだ余裕があるが、そろそろ駅構内へ戻ることにする。



実は、岩見沢駅の3番4番ホームには挽馬(ばんば)の像があるのである。

挽馬(ばんば)とはばんえい(挽曳)競馬でもよくわかるように、所謂そりを曳く馬のことで、北海道の列車同様、武骨な外観を

持った馬である。ちょっとやさそとでは足など折れますかいな！って、逞しい様相が北海道のシンボルみたいな像である。この像、挽馬象については木彫でありながら、その重量は馬具など含め1トンに及ぶそう。また、付属の馬具は挽馬の馬主会長から寄贈された由緒ただしきもの！道理でホームから飛び出てきそうな迫力である。残念ながら2006年をもって、惜しくも岩見沢競馬場では挽曳競馬はなくなってしまったが、帯広ではまだ開催されているとのこと、一度は見たいものだ。ただし、現金な小生。結局は勝ち馬投票券を振りかざし、馬そっちのけな感じも容易に想像できるのだが・・・



売店で買ったビールを朝っぱら頂きながら、小忙しく札幌近郊に向かう列車を何本か見送っていると、ようやくやってきました乗り継ぎ列車。電化区間にもかかわらずディーゼルが！



今度も北海道を代表するようなディーゼルカーキハ40系1700番台。寒冷地仕様が見て取れるこれまた朴訥で重厚な感じの列車だ。

これに乗ってゆっくりまずは滝川まで向かう。勿論・・飲みながら。



男は黙ってボックスシート。乗客は1両5名もいればいい方か？

あっけなくなってきたビールの次はお茶を頂く。お茶の蓋が開か開かないうちに列車は岩見沢を離れ、

空知大地に踏み出した。ゴゴゴゴオオオ・・・カラカラカラ・・・



甲斐甲斐しく列車は各駅に止まってゆく。
途中、何ともおしゃれな駅舎を見つけて、途中下車したくなる衝動に駆られるが、そこは我慢我慢。それにしても、空知の風景が美しい。



途中、こんな駅名も。



関西系のナンパだな
これは。



さしずめ その答え (京女だな)

どうやらサッポロクラシックがまわってきたようだ。上機嫌である。



砂川に近づくにつれて、車内に私以外の人を見つけることが難しくなってきた。

あっという間に、列車は滝川に到着。



キハ 40 のディーゼルカーとはここでお別れ。次は特急に乗り換えて、旭川速達コース！



現れたるは、キハ 183 系特急オホーツク。

滝川発 10 時 39 分。オホーツク 3 号に乗り込む、旭川までは 30 分弱。



流石特急、空知の風景が飛ぶように過ぎてゆく

勿論、自由席だが、5名もない乗客。
JR 北海道には申し訳ないが、結構快適である。



あっという間に旭川、お昼前に到着した。
角ばった非貫通型の先頭も好きな車両である。



旭川駅は函館本線の終点で、宗谷本線の起点。石北本線の全て列車が乗り入れている北海道有数の起点駅である。

旭川も北海道第2位の大都市であり、乗降客も多い、ガラガラだった自由席もある程よく埋まったようである。

駅舎は4代目で2011年に美しくリニューアルされた新しいものである。東川行のバスの時間が迫る。急か



されるように駅舎の外へ、外も近代的に改装されている。旧駅舎とのあまりの違いように少しがっかりするくらいな新駅舎である。

そんなことを思いながら外のバス停に小走りで向かう。



バス停は 10 番、駅からかなり走った。10 分ほどして、東川町方面へのバスが到着する。

バスの乗客は小生とおばちゃんそして高校生かと思われる女学生さん数名。何とも穏やかな車内である。旭川平野をバスがのんびり走ってゆく。正午を過ぎてお昼を食べてないことに気づく・・・まあこのまま東川まで進むことにする。バス路は続くよ 1 時間・・・



1 時を過ぎて、2 時前ごろ、我がふるさと納税の地、東川町に到着した。



感激の訪問ではあるが、実のところ、帰りのバスの都合上、滞在時間は 90 分もあるかないか？



兎に角、忙しくこの町の訪問をすませようと思う。まず、道の駅を兼ねたひがしかわ道草館、数々の農産物と写真の町を彷彿とさせる写真機の展示室が特徴的な交流館である。



町役場でふるさと納税株主へのワイン醸造の進捗をお聞きしたあと、役場の周りを散策

することにした。

流石写真の町を自任するだけあって、写真に関する建物やオブジェが多い。地域振興もこのように使うと税金の付託者がその効果を見やすいものになっている。田舎は寄付されて当然などと思っていることが見え透かされているどこかの町のような奢りや弱者気取りは全く感じられない。来年も寄付しようと思っている。



特に、写真コンクールの入賞者の作品をパネルにして街灯にかざすところなど憎い演出である。



東川町文化ギャラリー、東川町文化交流館などの町施設を通り過ぎると、どこまでも直線が続く道が現れた。それに直交する道もやはり直線、北海道らしい風景である。それと、道のそばに愛らしく咲く夏の花々・・・今度は泊まりで来よう。また、宿題が増えてしまった。こういう宿題はいつもうれしいものだ。

さて、ゆっくりも出来ない。帰りのバスと迫りくる雷雲に追い立てられながら帰路に着く。写真には納められなかったが、ここから先雨、ここから晴れという正しく夏の夕立の風景にあたふたしながらバスに乗った。



どうやら天気が安定しない北海道らしい、

驟雨を抜けて、雨上がりの旭川平野をバスは帰路に向かう。途中、乗り換えなどあったが概ね寝てしまったので、次に気づいたら旭川市街の碁盤の目状の町をバスがゆっくり進んでいた。午後は三時を優に超え、おやつ時間も怪しくなった頃。そう言えば、まだ昼めし食ってなかった。

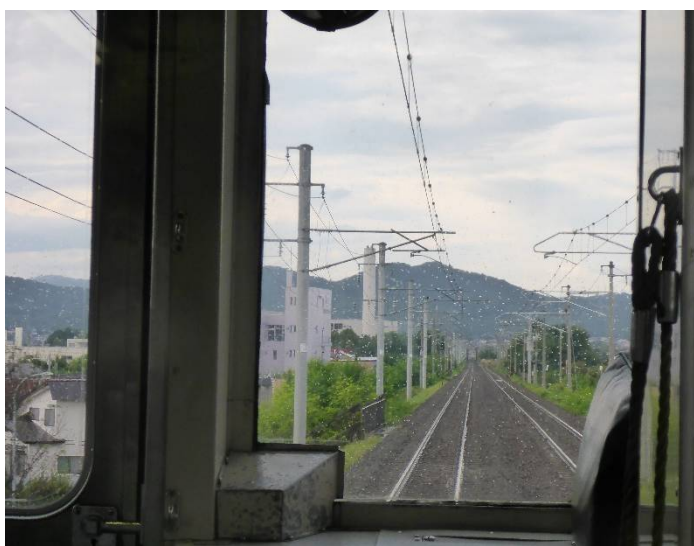
旭川駅前のラーメン屋が待ち遠しい・・・



駅前の山頭火で美味しい塩ラーメンを頂いたら、
札幌に向けて帰るとしよう。



新しくなった旭川駅をゆっくり見る間なく、
ホームに停車中のキハ54に飛び乗った。



旭川を離れるとまた雨が降り出した。
空知に入るトンネルに入る前には土砂降りになっていた。
いくつかトンネルを抜けて空知に戻ると雨はやみ、
その面影が曇る窓に残っていた。



程なくして深川に到着。
乗り継ぎまでの暫しの間、駅周りを見てまわる。

隣ホームに特急オホーツクをみながら、この列車が終着地につくのは深夜にちかくなるのだなと思いながら、次の列車を待つ。以外にこんな何もしない時間が必要なのだと、駅前から広がる山々を見ながら思った。



ようやく“電車”がやってきた。
札幌でよく見かける顔だ。



早速、乗り込む。空きシートがちらほら見える電車は岩見沢、札幌に向けて電車は順調に進んでゆく。



淡々と駅を
過ぎてゆく
列車。

それにしても車窓が素晴らしい。



夕日が雲間から大地に射す。天孫降臨な風景である。

このままこの列車に乗っても札幌には行けるのだが、スピードがシートに勝って、岩見沢で乗り換えて夕刻のラッシュで賑わう札幌に降り立った。



学会サボって、北の大地で列車に乗った一日。

札幌の会場では今回の同行学生 K さんが発表を聞いて一生懸命勉強していたことだろう、(後に彼女は広大に行くのだが、) こんなバカ県大にいて、学部生でこれだけ学会に行った学生、いや行かせた学生もいないと思う。そんなこと思い出してもらえれば、嬉しく思うが、小生こと指導教官が率先して列車に乗って楽しんでいるのを見てしまうと、当然、この特異性には気づかないのも納得かもね。

などと列車に乗り込む人たち見て思う。ともあれ、今日はこれからジンギスカンでも食べさそうか？

自身の特異性よりも一生懸命実験して研究データをたくさん出してくれる

彼女の県大生としての特異性に報いねば・・・

寿司とラーメンも追加かな？ 北菓楼のソフトも。

2014年 その年も忙しかった晩夏の一コマ 北海道チョイノリ記 完